

林原美術館の佇まい

岡山城内堀のすぐ西隣に武家屋敷の長屋門が目についた。城の関連施設と思いきや看板を見ると林原美術館とあった。しかしもともとここは岡山城の二の丸屋敷で対面所（迎賓館）が存在していた。明治維新後は旧藩主池田家の事務所となっていたが、1945（昭和20）年の岡山空襲で長屋門と土蔵を残して消失してしまう。

岡山の実業家（水飴製造業を成功させた）だった故林原一郎氏（1908～1961）は学生時代より刀剣の鑑賞、研究を続け名刀を数多く入手。更には日本をはじめ東洋古美術全般に眼を向け精力的に活躍するも、志半ばにして54歳の若さで逝去する。遺志を継いだ遺族が当時の県知事など多くの知人によって、伝統的環境に調和した近代的な林原美術館を1964（昭和39）年に開館している。



収蔵品には林原一郎氏個人コレクションと共に、旧岡山藩主・池田家から引き継いだ大名家の伝来品から成り立っている。それらの中には国宝・重要文化財も数多く含まれており、刀剣・武器・能面・彫漆・蒔絵等約1万件を所蔵している。

静かで落ち着いた佇まいの館内をゆっくりと見学させて頂いた。この日は「飛翔する蝶の紋」（戦陣の備え）企画展が開催されていた。戦国時代での備前池田家伝来の戦陣の道具をはじめ、池田光政所用の甲冑や刀剣などが展示されていた。特に驚いたのはユニークな蝶の家紋の纏や陣幕であった。この蝶のデザインの斬新さは現代にも即通用するほどのものであった。歴史を大切に作る人に、それを守る人に感謝だ。

撮影 2011 年秋

